

港区立郷土歴史館

歴史館だより

企画展「港区浮世絵さんぽ」より
高輪大木戸の石垣 — 変わりゆく風景を見つめて —神谷 蘭
(学芸員)

令和2(2020)年、JR線の新駅「高輪ゲートウェイ駅」が開業するなど、近年高輪周辺の風景が大きく変わってきています。そんな高輪を江戸時代から見守っていたものを、浮世絵を通してご紹介します。

江戸時代、この地は東海道沿いの江戸の入口にあたることから、治安維持と交通規制の役割を担う「大木戸」が設けられていました。宝永7(1710)年に、東海道の両側に石垣が築かれ、その間に門と柵があったといわれています。海岸の景色も美しく、月の名所としても有名であったため、沢山の人が集まり、賑わいました。門と柵はのちに撤廃され、石垣だけが残りましたが、この大木戸と広大な海岸の風景は、浮世絵の題材としても好まれ、多くの作品が残されています。大木戸のある風景は、高輪という場所を表現する、一つの定型のようになっていることが見て取れるのです。



歌川広重(三代)「東京名勝 高輪ノ真景」明治3(1870)年(当館蔵)
海岸側の石垣は健在です。馬車が駆け抜ける様子も描かれています。

令和2年、高輪築堤の発見がニュースになりました。このことは、海上を鉄道が走っていたという驚きとともに、今はビルがひしめく高輪に、かつては美しい海岸風景が広がっていたということを再確認するきっかけとなりました。浮世絵に描かれた風景は本当だった!と感動した方もいらっしゃるでしょう。時代が変わるにつれて、風景も大きく変わっていきます。その様子をつぶさに見ることができるのが、写真が一般的ではなかった時代のメディア的役割を担った浮世絵の醍醐味でもあります。

企画展「港区浮世絵さんぽ」では、港区域の風景を描いた浮世絵を沢山ご紹介いたします。どのように港区域の風景が変わっていったか、楽しみながら展示をご覧ください。ぜひ幸いです。



現在も石垣を見ることができます。
[高輪二丁目(第一京浜沿い)]



歌川国貞「東都名所 高輪廿六夜」弘化4(1847)年~嘉永5(1852)年(当館蔵) 2つの石垣の間を人々が通り、にぎわいを見せています。

しかし明治初年、大木戸は東海道を挟んで山側(西)の石垣が、道路の拡張によって取り払われたため、浮世絵に描かれるのは海岸側(東)の石垣だけになっていきます。片方の石垣が失われ、江戸時代に親しまれた大木戸の風景は変わってしまいましたが、海岸を走る馬車や人力車の様子が、明治時代の高輪を象徴する風景となっていきました。さらには

参考文献 港区立郷土資料館『増補 港区近代沿革図集 高輪・白金・港南・台場』2008年



港区立郷土歴史館

歴史館だより

港区最大級の弥生時代集落

信濃飯山藩本多家屋敷跡遺跡の発掘調査

橋本 望

(東京都埋蔵文化財センター調査研究員)

信 濃飯山藩本多家屋敷跡遺跡（港区No.64遺跡）は、JR品川駅から西に500mほど離れたグラウンドプリンスホテル高輪などが立ち並ぶ台地の縁辺部に立地しています。古地図によると、江戸時代には信濃飯山藩本多家の屋敷が所在したとされており、明治時代には旧宮家の一つである北白川宮家の邸宅が建てられていました。衆議院議員宿舍の跡地整備に先駆けて、平成30（2018）年～令和2（2020）年にかけて発掘調査が行われましたので、その成果の一端を紹介します。

発掘調査により、縄文時代～近代にかけてのさまざまな遺構・遺物が発見されています。中でも、弥生時代後期（約2,000～1,800年前）の竪穴建物跡が調査地全域（約7,800㎡）にわたって70軒以上発見されており、港区では最大級の弥生時代集落だったことが明らかになりました。

この時期の竪穴建物跡の平面形は、隅が丸い四角形で、概ね北西方向に主軸を揃えて建てられています。ほとんどの建物跡は互いに重なり合っていないことから、集落は比較的短期間に形成されたことがわかります。規模からみて、東京湾西岸地域における拠点的なムラの一つであった可能性があります。

弥生時代の他の遺構としては、一辺7～8mを有する方形周溝墓2基が見つかっています。方形周溝墓は周囲に溝を掘り、その土を盛り上げた中央部に死者を埋葬した有力者の墓です。発見されたのは周溝のみですが、その位置関係から2基が周溝の一部を

共有する形で配置されていました。

この時代の遺物としては、壺や甕、高坏などの土器、砥石などの石器の他、土製勾玉や銅鏃といった貴重な遺物も発見されました。

このように、集落だけでなく、墓域も発見されたことで、当時の人々の生活を復元する上でたいへん重要な資料が得られました。

古墳時代の竪穴建物跡は5軒検出され、おもに調査地の東側に偏って分布しており、時代によって居住域が移動していたのかもしれませんが、出土遺物としては蒸し器である甑や甕などの他、滑石で剣をかたどった剣形模造品や、糸を通してつながっていたと考えられる石製の勾玉1点と管玉5点が見つかっています。

奈良時代の竪穴建物跡も6軒検出されています。このうちの1軒は都内でも稀な一辺7mに達する規模の大型住居です。古いカマドを壊して新しいカマドを作り直していることなどから、少なくとも一度は建物を拡張したことがわかります。

この時代の遺物として、馬具の鐙に付属する鉸具（鞍の革ベルトに装着する器具）が発見されており、馬が利用されていたことが窺えます。

江戸時代の屋敷跡は発見されませんでした。調査地西側の二本榎通りに沿うように、火事で焼け残った瓦や陶磁器などを捨てた焼土廃棄土坑や地下室な

どが確認されています。また、レンガ製の建物基礎が調査地全般で見つっていますが、これらは北白川宮邸に伴うものと判明しました。

今回の発掘調査で得られた成果は、いずれも港区の歴史を考える上で貴重なものです。現在、当センターでは調査成果をまとめた報告書の作成を進めており、令和3年度末に刊行する予定です。



出土した弥生時代の壺（東京都埋蔵文化財センター提供）



竪穴建物跡の検出状況（東京都埋蔵文化財センター提供）